

山岡元隣『宝蔵』箋註（十二）：卷六・追加発句 （51）～（100）

川平，敏文
九州大学

<https://doi.org/10.15017/7363934>

出版情報：雅俗. 22, pp.105-115, 2023-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



山岡元隣『宝蔵』箋註(十二) — 卷六・追加発句(51)～(100) 川平 敏文

●底本・挿絵図版は寛文十一年刊『宝蔵』（国立国会図書館デジタルコレクシヨン）による。

●翻字・注釈方針は『雅俗』第二一・一五・二一の各号を参照されたい。

●本稿は、九州大学大学院における演習の成果を基としている。今回掲出分の礎稿作成者は以下の通り。括弧内は句番号。

土屋萌子（51、87～91）、平尾晃代（52～56、82～86）、白路（57～61、87～96）、前川暁（62～66）、高木一希（72～76）、田島智弘（77～81）、大牟田拓海（97～100）

これらの礎稿をもとに、川平が本文・注釈の全内容を、原資料にあたって確認・追補・修正した。諸賢の御教示を乞いたい。

51 やなぎ髪ふきすく風やけづりぐし 形知 正次

《作者》形知氏。ただし『鶯笛』（寛文十三年刊）には「形和氏／正次」（『貞門談林俳人大観』三四七頁）とある。

《季語》やなぎ髪〔春〕

《語釈》○やなぎ髪＝柳の枝を女性の髪に見立てたもの。「気霽れては風新柳の髪を梳る」（都良香、『和漢朗詠集』春上）。○けづりぐし＝髪を梳かすこと。

52 柳がみも髪なり花のかほも顔

《作者》岡氏。京都住。伝未詳。 岡 成近

《季語》柳がみ、花のかほ〔春〕

《語釈》○柳がみ＝第51句参照。○花のかほ＝美しい女性の顔の形容。

《句意》柳髪というのも一つの髪、花の顔というのも一つの顔である。

《補説》「柳は緑、花は紅」などと、柳と花は対で用いられることが多い。

53 髪長とやなぎも見るや神のには 元長

《作者》伝未詳。

《季語》やなぎ〔春〕

《語釈》○髪長^{かみなが}＝齋宮で僧侶のことをいう忌み詞（『延喜式』卷五）。○神のには（庭）＝神社の境内。「庭＝柳」（『類船集』）。

《句意》神社の境内では、柳さえも髪長といって忌み嫌われるのであろうか。

《補説》「髪」と「神」の同音反復の面白さ。

54 野々宮もいまぬ髪長はやなぎかな 名古屋高木 皆醉

《作者》 第4句に既出。

《季語》 やなぎ〔春〕

《語釈》 ○野々宮Ⅱ内親王が斎宮となるさいに籠る潔斎所。 ○髪長

Ⅱ第53句参照。

《句意》 野々宮であっても忌むことのない髪長とは、柳であるなあ。

55 雪の松のおも荷かるむる春日かな 同

《作者》 第4句に既出。

《季語》 春日〔春〕

《語釈》 ○雪の松Ⅱ雪のかかった松。 春日Ⅱ春の日差し。

《句意》 雪のかかった松の重荷を軽くしてくれる、春の日差しであるよ。

《補説》 類句「男松には恋の重荷か雪女」（一守、『ゆめみ草』巻四）、

「雪をれの竹もつつたつ春日哉」（休甫、同・巻一）。

56 ねはんざうおがむは数珠の御弟子哉 水谷 正保

《作者》 水谷氏。伝未詳。

《季語》 ねはんざう〔春〕

《語釈》 ○ねはんざう（涅槃像）Ⅱ臨終の床に横たわる釈迦の姿を象つ

た像。涅槃図には、釈迦の周囲にたくさん弟子や動物たちが描か

れる。 ○数珠Ⅱ多くの珠を糸で貫いた仏具。 ○弟子Ⅱ数珠の親

珠から分岐して付けられた子珠を弟子珠という。「弟子Ⅰ数珠」（『類

船集』）。

《句意》 涅槃像を拜んでいるのは、数珠の弟子珠よろしく、御弟子た

ちなのだなあ。

《補説》 類句「数とるや弟子等は数珠の珠霰」（貞室、『玉海集』巻四）。

57 かへるにも時正たがへぬ雁字かな 杉森 信親

《作者》 杉森氏。近松門左衛門の曾祖父（『杉森家系譜』）。ただしこの

頃存命とは考え難い（大橋正叔「研究ノート 近松と三槐九卿」、『近

松研究所紀要』14、二〇〇三年）。

《季語》 時正〔春〕

《語釈》 ○かへるⅡ雁が「帰る」と、文字が「返る」の掛詞。 ○時

正Ⅱ昼夜が正しく半分の意。春分と秋分があるが、単に時正とだけ

言えば春。ここは字形の意の「字性」も掛ける。

《句意》 北へ帰るときにも時正の日を違えない雁の群れだ。

《補説》 漢文訓読に使われる返り点の一つ、レ点のことを「雁点」と

もいう。時正を違えず帰る雁だけに、返り点も正しく謹直に書かれ

るの意。類句「雁金も文とはみえて字性なし」（季吟、『俳諧塵塚』

巻上）。

58 はなを見すてどこの国にか帰る雁 読人不知

《作者》 未詳。

《季語》 帰る雁〔春〕

《語釈》 特になし。

《句意》 美しく咲いている花を見捨てて、雁はいつたいどこの国に帰

るのだろう。

《補説》 「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる」（伊

勢、『古今集』春上)を踏まえる。類句「花よりも団子やありて帰雁」(貞徳、『犬子集』巻一・春上)。

59 よむつたも蛙は無心所着かな

尾州神原 風箔

〈作者〉第3句に既出。

〈季語〉蛙〔春〕

〈語釈〉○うた、蛙Ⅱ「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」(『古今集』仮名序)。

○無心所着Ⅱ歌論用語で、道理に外れること。

〈句意〉蛙も歌を詠むが、しかしそれは無心所着の意味不明な歌なのであろうなあ。

60 口はひろく心せば井のかはづかな

尾州曾我 心計

〈作者〉第24句に既出。

〈季語〉かはづ〔春〕

〈語釈〉○口はひろくⅡ蛙の口の形状と、大口をたたく意を掛ける。

○せば井Ⅱ「狭い」と、「井の中の蛙」の掛詞。○井のかはづⅡ「井の中の蛙、大海を知らず」(『毛吹草』巻二)。狭い知見しか持つていないことの喩え。

〈句意〉大きな口で偉そうなことを言っても心が狭いのは、まさに井の中の蛙だなあ。

61 よむつたに誰もめでくつ蛙哉

加州 信貞

〈作者〉加賀住。伝未詳。

〈季語〉蛙〔春〕

〈語釈〉○うた、蛙Ⅱ第59句参照。○めでくつ蛙Ⅱ「愛で覆る」(大いに賞嘆するの意。『大和物語』などにも用例あり)と「蛙」の掛詞。

〈句意〉蛙の詠む歌には、誰しも大いに感嘆することだなあ。

つばきの花の折句

62 つれゆけば気もはるゝ山の春べかな

水谷 正継

〈作者〉第33句に既出。

〈季語〉春べ〔春〕

〈語釈〉○折句Ⅱ各句の定位置に文字を詠み込む技法。ここは句の首尾に「つばきのはな」の六文字が折り込まれた沓冠折句。○春べⅡ春のころ。

〈句意〉ともに連れ立ってゆけば、気も晴ればれとする春の山だ。

〈補説〉「はるゝ」と「春」の同音反復。

63 手なくとも花の紐とけ雨のあし

野州宇都宮家所 玄調

〈作者〉家所氏。宇都宮住。伝未詳。『宝蔵』に四句入集。

〈季語〉花の紐〔春〕

〈語釈〉花の紐、とけⅡ結んだ紐が解けることから、花の蕾が開くこと。○雨Ⅱここでは春雨。「解—花の紐は春雨にとくる」(『類船集』)。「ふして思ひおきて詠むる春雨に花の下紐いかでとくらむ」(よ

み人知らず、『新古今集』春上)。

〈句意〉手がなくとも花の紐を解いてくれ、春の雨脚よ。

〈補説〉「手」と「脚」の対比。

64 はなの紐とくは君子かはるの風 元恕

〔作者〕 第44句に既出。

〔季語〕 はなの紐、はるの風〔春〕

〔語釈〕 はなの紐Ⅱ第63句参照。○とく、君子、風Ⅱ「君子の徳は風。小人の徳は草」〔『論語』顔淵篇。〕「とく」は「解く」と「徳」の掛詞。

〔句意〕 花の紐を解くのは、君子の徳をふくんだ春の風だろうか。

65 いたいけなはなのころもは木だち哉 野宇都宮桜井 玄玖

〔作者〕 第38句に既出。

〔季語〕 はなのころも〔春〕

〔語釈〕 ○いたいけⅡかわいらしい。○はなのころもⅡ花を、華やかな衣服に見立てた。○木だちⅡ「木立ち」と「小裁ち」の掛詞。「小裁ち」は、幼児の着物の裁ち方。

〔句意〕 春の木立ちのなかに咲く、かわいらしい花の衣は、小裁ちであるなあ。

66 さくころの日にあやかれよ花ざかり 江戸嶋 久隆

〔作者〕 江戸住。嶋氏。伝未詳。

〔季語〕 花ざかり〔春〕

〔語釈〕 ○あやかるⅡ恵みを受ける。「永日にあやかる梅の立ち枝かな」〔徳元、『塵塚俳諧集』巻下〕、「春の日にあやかるやうき遅桜」〔憲之、『続山井』春之発句中)。

〔句意〕 咲くころの日脚の長さにあやかっておくれ、盛りの花よ。

〔補説〕 少しでも長く花の盛りを見続けたいという願望。

67 さくはなをみやこつつしか東山 不問

〔作者〕 第11句に既出。

〔季語〕 はな〔春〕

〔語釈〕 ○東山Ⅱ花の名所。「花―東山」〔『山之井』巻一)。

〔句意〕 まるで都移しをしたかのような、東山の花のにぎわいであるよ。

〔補説〕 本来、「花の都」は都の美称であるが、ここは東山を文字どおり「花の都」とした。

68 花に目や身にさきだてる案内者 梅村 一正

〔作者〕 梅村氏。伝未詳。

〔季語〕 花〔春〕

〔語釈〕 ○花Ⅱ「鼻」の意を掛ける。「目」「身」の縁語。○案内者Ⅱ「アンナイシヤ 案内人、あるいは、ある場所の入口や出口を知っている人」〔『邦訳日葡辞書』)。

〔句意〕 鼻と目は、花見のとき、私の身に先立つ案内者のようであるよ。

〔補説〕 似た趣向の句に、「匂ひこそ花咲山の案内者」〔口遊、『軒端の独活』巻乾)、「先立や梅が香をかくはなの春」〔詠者不明、『犬子集』巻一・春上) などがある。

69 しら雲やはななき山の恥かくし 杉森 信盛

〔作者〕 杉森氏。のちの浄瑠璃作者、近松門左衛門。

〔季語〕 はな〔春〕

〔語釈〕 ○しら（白）雲〓しばしば花に見まがわれる。たとえば「しら雲を枝にやつぎ木花盛」（吹白、『崑山集』巻二）。 ○恥かくし〓恥を覆い隠すもの。「降る雪のみのしろ衣や恥かくし」（維舟、『時勢粧』第三）。

〔句意〕 白雲は、花が咲かない山の恥隠しのようなものだ。

〔補説〕 類句「つむ雪や花なき山の恥かくし」（頼広、『ゆめみ草』巻四）。

70 はるのやまのもらひ笑かはなの顔 谷口 重以

〔作者〕 第2句に既出。

〔季語〕 はな〔春〕

〔語釈〕 ○はるのやま、笑〓宋の画家郭熙の「春山淡冶にして笑ふが如し」（『説郭』巻九二上所収『画史』ほか）を踏まえる。 ○はなの顔〓花を顔に見立てたもの。「花笑み」（『山之井』巻一）という言葉もあり、花が美しく咲くこと。

〔句意〕 春の山は笑うというが、花が顔をほころばせて美しく咲いているのは、山から貰い笑をしたためだろうか。

71 駕をまたでゆくもや君と花の前 名古屋高木 皆酔

〔作者〕 第4句に既出。

〔季語〕 花〔春〕

〔語釈〕 ○駕をまたでゆく〓「君命じて召せば、駕を俟たずして行く」（『論語』郷党篇）による。

〔句意〕 駕籠を待つこともなく行くことだ。主君と花の前のお召しと

あらば。

〔補説〕 桜を「花の前」という姫君のような名に擬して、花見にはやる気持ちを詠んだ。

72 氈もつて宝としくや花の陰 元恕

〔作者〕 第5句に既出。

〔季語〕 花〔春〕

〔語釈〕 ○氈〓毛織の敷物。中には「宝相華文」と呼ばれる、華麗な唐草文様をあしらった花氈もある。 ○花の陰〓花の咲いた桜の木陰。「花の陰や雨ふらぬ日も人宿り」（四朋、『続山井』春之発句中）。

〔句意〕 宝相華文をあしらった花氈を敷いたつもりで、花の陰に憩おうか。

〔補説〕 実際は粗末な毛氈であるが、桜の花が舞い散って花氈のようになった、との見立てか。

73 かざしてはもちばならぬ花もなし 尾州曾我 心計

〔作者〕 第24句に既出。

〔季語〕 花〔春〕

〔語釈〕 ○かざす、はな（花）〓「もしきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮しつ」（山部赤人、『和漢朗詠集』巻上）。 ○もちばな（餅花）〓木の枝などに餅を突き通して花に見立てた、正月の飾り物。「持ち花」の意も掛ける。

〔句意〕 手に持ってかざすのであれば、餅花（持ち花）でない花はない。

74 神はいさ人々は留守花ざかり 野州桜井 玄玖

〈作者〉 第31句に既出。

〈季語〉 花ざかり〔春〕

〈語釈〉 ○神はいさ＝「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香にほひける」（紀貫之、『古今集』春上）を踏まえる。

〈句意〉 神々はどうか知らないが、人々は家を留守にしよう花盛りの季節である。

〈補説〉 神々は十月になると出雲に参集するため、その地を留守にするという。それに対して人は、の意。

75 花山にやころの馬もはなしがひ 谷口 重以

〈作者〉 第2句に既出。

〈季語〉 花〔春〕

〈語釈〉 ○花山＝「クワサン 非常に花の多い山」（『邦訳日葡辞書』）。

○ころの馬＝「心の馬とは さはがしき事なり」（『和歌呉竹集』卷七）。

〈句意〉 花の咲き乱れた山には、心の馬も放し飼いになってしまい、我を忘れてしまうことだ。

〈補説〉 類句「花野にや心の駒もはなしがひ」（道之、『続山井』秋之発句中）。

76 せきでらのはなや小町が若ざかり 堅田藤遠 教重

〈作者〉 第35句に既出。

〈季語〉 はな〔春〕

〈語釈〉 せきでら、はな、小町＝謡曲『関寺小町』の世界。晩年、落魄して近江国関寺に住む小野小町が、「老木の花」に喩えられる。

〈句意〉 あの関寺の花ではあるが、小野小町の若盛りのように美しい。

〈補説〉 類句「姥桜花や小町がわかざかり」（正重、『続山井』春之発句中）。

清見が関にて

77 きよ見よといはぬばかりぞ花衣 尾州禰原 風箔

〈作者〉 第3句に既出。

〈季語〉 花衣〔春〕

〈語釈〉 ○清見が関＝駿河国の関所。○花衣＝花を美しい衣装に喩えたもの。

〈句意〉 着よ、見よと言わんばかりの、美しい衣装のような清見が関の花の姿だ。

〈補説〉 「きよみ（清見）」の文字を詠み込むともに、「着る」「衣」の縁語で繋げた。

千本にて

78 はな一木千本の中のながめかな 樋口 正房

〈作者〉 樋口氏。伝未詳。

〈季語〉 はな〔春〕

〈語釈〉 ○千本＝京都の地名。千本閻魔堂（引接寺）の普賢象桜が有名。

〈句意〉 たった一本で千本の花に匹敵する、普賢象桜の眺めだなあ。

〈補説〉 「千に一つ」（千に匹敵する一つ）という慣用表現を使う。類

句「梅一木千人のそでのほひかな」(昌叱、『大発句帳』春部)。

79 我日々に三つながら見ん雪月花 元恕

《作者》第5句に既出。

《季語》花「春」

《語釈》○我日々に三つながら見ん〓「曾子曰く、吾れ、日三ながら吾が身を省る」(『論語』学而篇。上は元禄五年和刻本『四書集註』の訓読例)を踏まえる。「日に三たび身をかへりみよ」(『毛吹草』卷二)。

《句意》私は日々、心に雪月花の三つを見て、風流心を忘れないようにしよう。

《補足》「雪月花」は冬・秋・春いずれの季節にも取り得るので、季語としては弱い。「よはき物や春の部にとる雪月花」(加友、『山之井』春部)。

80 はなに来て雪にきかねる友もがな 樋口 正房

《作者》第78句に既出。

《季語》はな「春」

《語釈》○はな、雪、友〓「友ー雪、花」(『類船集』)。○雪にきかねる〓王子猷が雪の夜に戴安道を尋ねたが、明け方になって月も隠れたというので、会わずに門前から引き返したという故事(『蒙求』「子猷尋戴」)によるか。

《句意》花の頃にやってきて、雪の頃には来かねるような風流な友がいればいいなあ。

《補説》類句「花に来て雪にわする、家路かな」(『大発句帳』卷一)。

81 花をさかせ又ちらするは異風かな 杉森 信義

《作者》杉森氏。信盛(近松門左衛門)の父。

《季語》花「春」

《語釈》○異風〓変わった趣向。「異風者」という言葉もある。

《句意》花を咲かせるかと思えば、散らしもする。春の風とは変わり者であるなあ。

《補説》類句「花はさかせ心気はちらせ春の風」(二井、『崑山集』卷二・春部)。

82 風気さらば花にもくまんしやうが酒 井狩 友静

《作者》第8句に既出。

《季語》花「春」

《語釈》○風気〓「フウキ(風気) ひどく熱の出る、ある伝染性の病氣」(『邦訳日葡辞書』)。○しやうが酒〓生姜を入れて煮た酒。生姜は風邪や頭痛などの体調不良に効くとされた(『食物和歌本草増補』卷一「生薑」)。

《句意》風気が去るというのであれば、花ともこの生姜酒を酌みかわして、風を防ぐとしよう。

《補説》類句「花ちらす風気は人の病哉」(季治、『ゆめみ草』卷四)。

83 はなちらす風情はあまりあらし哉 江州多賀 延純

《作者》第34句に既出。

《季語》はな「春」

《語釈》○風情〓「風」(かぜ)と「風情」の意を掛ける。○あらし〓「嵐」

と「あらじ」の掛詞。

《句意》花を散らす嵐は、同じ風でも、風情というものをあまりもつていないのだなあ。

84 くろいすぢなきや老木のはなの瀧

名古屋高木 皆醉

《作者》第4句に既出。

《季語》はなの瀧〔春〕

《語釈》○くろいすぢ＝黒髪の比喩。「落ちたぎつ滝のみなかみ年積り老いにけらしな黒き筋なし」（壬生忠岑、『古今集』雑歌上）。○はなの瀧＝「花の滝と云は、瀧のごとくの落花をも、又花のちり交て落る滝をも、又花の中に落る滝をも申詞なり」（慶安四年版『御傘』）。白色のイメージ。「花の瀧と見なすや白き糸桜」（雲宵、『続山井』春之発句中）、「白糸をみだいたやうな花の滝」（不数、同）など。

《句意》老木から散り落ちた花の滝は、白髪のように真っ白で、黒い筋（黒髪）が混じることはないのだろうか。

85 風に花しづかならでやよし野落

尾州神原 風箔

《作者》第3句に既出。

《季語》花〔春〕

《語釈》○しづか＝「静寂」の意と、源義経の妾「静御前」の意を掛ける。○よし野＝桜の名所。また義経が追手から逃れ、静御前と別れて身を隠した地。「吉野―静」（『類船集』）。

《句意》花が風に吹かれて落ちるように、義経は騒然とするなか、静御前と別れ、吉野の奥へ落ちのびていったのだろうか。

《補説》「春の夜も静かならで、騒がしき吉野の、山風に散る花までも、追手の声やらんと、跡をのみみ吉野の、奥深く急ぐ山路かな」

（謡曲『二人静』の世界）

86 水の綾のうき紋となる落花かな

江州多賀 延純

《作者》第34句に既出。

《季語》落花〔春〕

《語釈》○水の綾＝水面を綾織物に喩えたもの。「水のあやのしはりなをすこほり哉」（詠者不明、『犬子集』巻六・冬部）。○うき紋＝模様が浮き出るようにして織られた紋。

《句意》水面に落下した花びらは、まるで綾織物の上に浮紋を施したようだ。

《補説》類句「水鳥は浮紋なれや波のあや」（怒一、『犬子集』巻六・冬部）。

87 花は変化葉はすぐばけよ春の色

入江 相違

《作者》入江氏。伝未詳。

《季語》花、春〔春〕

《語釈》○変化＝「ヘンゲ（変化）他の物の姿に化けること」（『邦訳日葡辞書』）。○すぐばけ（直化）＝遊女の手管のひとつで、有体に身の上を語るなどして客を惹きつけること（『色道大鏡』巻二）。

《句意》花は変化の者、葉は直化の者のように、人を惹きつけることだなあ、春の景色は。

世つぎに家を譲れる人の悦に

88 かしこきにかしこ木やつぐはなの宿

神原 伊安

〔作者〕 第42句に既出。

〔季語〕 はなの宿〔春〕

〔語釈〕 ○かしこきにかしこ木やつぐ〓「しな・かたちこそ生れつき
たらめ、心はなか賢きより賢きにも移さは移さざらん」〔『徒然草』
第一段〕を意識した表現か。「かしこき」は「賢き」と「木」、「つ
ぐ」は「(家を) 継ぐ」と「(木を) 接ぐ」の掛詞。

〔句意〕 接木のように、賢き親から賢き子へと受け継がれたことだな
あ、この花の咲く家では。

89 つら杖はすがたの花のそへ木かな

名古屋高木 皆醉

〔作者〕 第4句に既出。

〔季語〕 すがたの花〔春〕

〔語釈〕 ○つら杖〓頬杖。「脇息につら杖つきて数珠をくり」(維舟、
『時勢粧』第四下)。○すがたの花〓美人を花に喩えた表現。「姿の
花」〔『毛吹草』巻二「連歌恋之詞」〕。

〔句意〕 美しい顔を支えている頬杖は、花を支えている添え木のよう
なものだなあ。

〔補説〕 頬杖について物を案じている美女を、桜に添え木が付けられ
ている様子に見立てた。

90 しゆらをやる人やこゝろはないくさ

石井 吉明

〔作者〕 石井氏。伝未詳。『蘆花集』(寛文五年刊)、『誹諧渡奉公』(延

宝四年刊)などに入集。

〔季語〕 こゝろのはな、はないくさ〔春〕

〔語釈〕 ○しゆら(修羅)をやる〓嫉妬心を起こすこと。「男の徒なる
によりおこりたる、りんきいさかひの修羅をたつるなり」〔『醒睡笑』
巻六「悋気」〕。「修羅」には闘争の意もある。○はないくさ(花
軍)〓花の枝で打ち合う遊び。「花軍や春の血気の夕嵐」(厚成、『ゆ
めみ草』巻一)。

〔句意〕 嫉妬をする人は、心の中で花軍をしているようなものだ。

〔補説〕 攻撃的ではあるが恋慕の情なので、艶やかな花の軍に喩えた。
「修羅」と「花軍」は縁語。

いさゝかうらめる事侍る友に、さかづきとらせて

91 こゝろこそたねよ根葉なき花の友

神原 伊安

〔作者〕 第42句に既出。

〔季語〕 花の友〔春〕

〔語釈〕 ○こゝろ、たね〓「やまとうたは人の心を種として、万の言
の葉とぞなれりける。……男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも
慰むるは歌なり」〔『古今集』仮名序〕。○根葉〓遺恨。○花の友
〓花見の友。

〔句意〕 人の心は種に喩えられるが、私の心にはもう根葉(遺恨)は
ない。友よ、花見を楽しもう。

〔補説〕 「たね」「根葉」「花」は縁語。『古今集』仮名序の表現を踏ま
え、今の自分にはもう諍いの気持ちはなく、穏和そのものだとした。

92 月花を見にもとむるも君子かな 寿玄

〔作者〕伝未詳。『埋草』（寛文三年刊）、『続山井』（寛文七年刊）などに入集。

〔季語〕花〔春〕

〔語釈〕○見Ⅱ「身」との掛詞。○もとむる、君子Ⅱ「子曰く、君子は食飽かんことを求むること無く、居安からんことを求むること無し。……学を好むと謂うべきのみ」（『論語』学而篇）、「子曰く、君子は諸を己に求む。小人は諸を人に求む」（同・衛霊公篇）などを踏まえるか。

〔句意〕月や花を見ようと心掛けるのも、君子として身に付けるべき素養であるなあ。

93 花にいやな風は空ふけ月の雲 杉森五郎助十一歳 信秀

〔作者〕杉森氏。伝未詳。近松の末弟五郎吉か（森修『近松門左衛門』、三一書房、一九五九年、一三頁）。

〔季語〕花〔春〕

〔語釈〕○花、風、月、雲Ⅱ「月に叢雲、花に風」（『せわ焼草』巻二）。良いことには邪魔が入りやすいという喩え。

〔句意〕花に厭われる風よ。空に向かって吹き、ついでに月にかかる雲を払いのけよ。

94 えもおらじかぜさへいやなはつ桜 元恕

〔作者〕第5句に既出。

〔季語〕はつ桜〔春〕

〔語釈〕○えⅡ「枝」と、可能を表す副詞「え」の掛詞。○はつ桜

Ⅱその年初めて咲いた桜。

〔句意〕さすがに申し訳なくて、枝を折ることはできないのだろう。風までもが嫌がる初桜であるよ。

95 さくらばな春苦はある嵐かな 津田 春重

〔作者〕津田氏。伝未詳。『大海集』（寛文十二年刊）に入集。

〔季語〕さくらばな〔春〕

〔語釈〕○さくらばな、春苦Ⅱ「桜花春くははれる年だにも人の心にあかれやはせぬ」（伊勢、『古今集』春上）の上の句をもじった。「春苦」は、春の苦しみの意。○嵐Ⅱ桜の大敵。「家に鼠桜にはあらし哉」（朝平、『続山井』春之発句中）

〔句意〕桜花にとって春の苦痛は、花を吹き散らす荒々しい嵐であるなあ。

96 糸ざくらながめことじにかはかな 杉森 信義

〔作者〕第81句に既出。

〔季語〕糸ざくら〔春〕

〔語釈〕○糸ざくら、ことじ（琴柱）Ⅱ「糸ー桜、琴」（『類船集』）。「こと」は「琴」と「異」の掛詞。○ことじにかは（琴柱に膠）Ⅱ融通が利かない意の諺であるが、ここではずっとこの眺めをとどめておきたい、の意か。

〔句意〕この糸桜の眺めは、琴柱に膠してとどめておきたいほど素晴らしい。

97 風の手をしめあげてをけ糸ざくら 入江 相違

〈作者〉 第87句に既出。

〈季語〉 糸ざくら〔春〕

〈語釈〉 ○風の手＝風を擬人化したもの。「くぢけよな花に風の手雨の足」(四朋、『続山井』春之発句中)。○手をしめあげ＝「手をしむる＝賊の縄」(『類船集』)。

〈句意〉 花を散らしてしまふ、憎き風の手を捕縛しておいてくれ、糸桜よ。

〈補説〉 「しめ(締め)」と「糸」は縁語。

98 引てきてそだてゝ見るやいぬ桜 江州多賀 性映

〈作者〉 伝未詳。

〈季語〉 いぬ桜〔春〕

〈語釈〉 ○引きて、いぬ＝「引ー犬」(『類船集』)。○いぬ(犬)桜＝桜に似ているが花は小さく見劣りする。

〈句意〉 ここまで引いてきて育ててみようか、犬桜を。

〈補説〉 「山陰に痩せさらばへる犬桜追ひはなたれて引く人もなし」(源俊賴、『散木奇歌集』春部)を踏まえる。

99 愛するやげにぼんなふのいぬざくら 同所大岡 宗朗

〈作者〉 第35句に既出。

〈季語〉 いぬ桜(春)

〈語釈〉 ぼんなふのいぬ(煩惱の犬)＝「煩惱の犬は打てども門をさらず」(『世話焼草』卷二)。逃れがたいものの喩え。○いぬざくら

(犬桜)＝第98句参照。

〈句意〉 煩惱の犬というが、まことにこの犬桜を愛する気持ちは、逃れがたいものだなあ。

〈補説〉 謡曲『通小町』に、「煩惱の犬となつて、打たるゝと離れじ」などとあるのを踏まえ、愛着の強さを表現した。

100 山めぐり見るや山又やまざくら 読人不知

〈作者〉 未詳。

〈季語〉 山ざくら(春)

〈語釈〉 ○山めぐり、やまざくら＝「春は梢に咲くかと、待ちし花を尋ねて山めぐり。……山又山に山めぐり。山又山に山めぐりして、行方も知らずなりにけり」(謡曲『山姥』)。

〈句意〉 あたかも謡曲の「山姥」のように、山々を巡り巡って、山桜を見ようか。

(以下続稿)